2018年度名古屋学芸大学健康・栄養研究所　研究・実践報告

■研究・実践の課題（テーマ）

クルミ、カシューナッツ単独アレルギー患者と両者合併患者のアレルゲンの比較検討と交差抗原性に関する検討

■主任研究者　和泉秀彦

■共同研究者　田上和憲、田中賀治代、伊藤浩明

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

【目的】

クルミ（WN)、カシューナッツ（CN)アレルギー児におけるアレルゲン感作が、交差抗原性か、独立した重複感作によるものかを明らかにする。本件急は、ナッツ間の交差抗原性を患者の臨床的交差反応と合わせて検討する新規知見となる。なお、交差抗原性が確認されなかった場合、クルミとカシューナッツについては個別の評価が必要であると判断も出来る。いずれの結果においても、臨床の現場に有用な情報をフィードバックすることができると考える。

【方法】

WN・CNアレルギー（WCA)、WNアレルギー（WA)、CNアレルギー（CA)、非WN・非CNアレルギー（NWCA)の各血清を用いて，ELISA及びImmunoblotのinhibition assayを行った。WN、CNは脱脂しPBSで抽出した粗抗原を使用した。

【結果】

ELISAでは､WNへのIgE結合は､検体差を認めたがCNにより濃度依存的に抑制された。Immunoblot inhibitionでは、CNの14kD, 40-60kD、WN の10kD, 40-50kDのタンパク分画がそれぞれWN、CNにより抑制された。しかし、これらの交差抗原性はWCA、WA、CA、NWCAに規則性なく存在し、WCAに特異的ではなかった。

【結論】

WN・CN間に交差抗原性は認められたが、その交差アレルゲンはWCAに特異的でなかった。従って、WCAは交差抗原性にのみ依存せず、独立した重複感作が基盤にある可能性が示唆された。つまり、クルミ、カシューナッツに関しては個別の評価が必要である。